



28 モンシロチョウ シロチョウ科



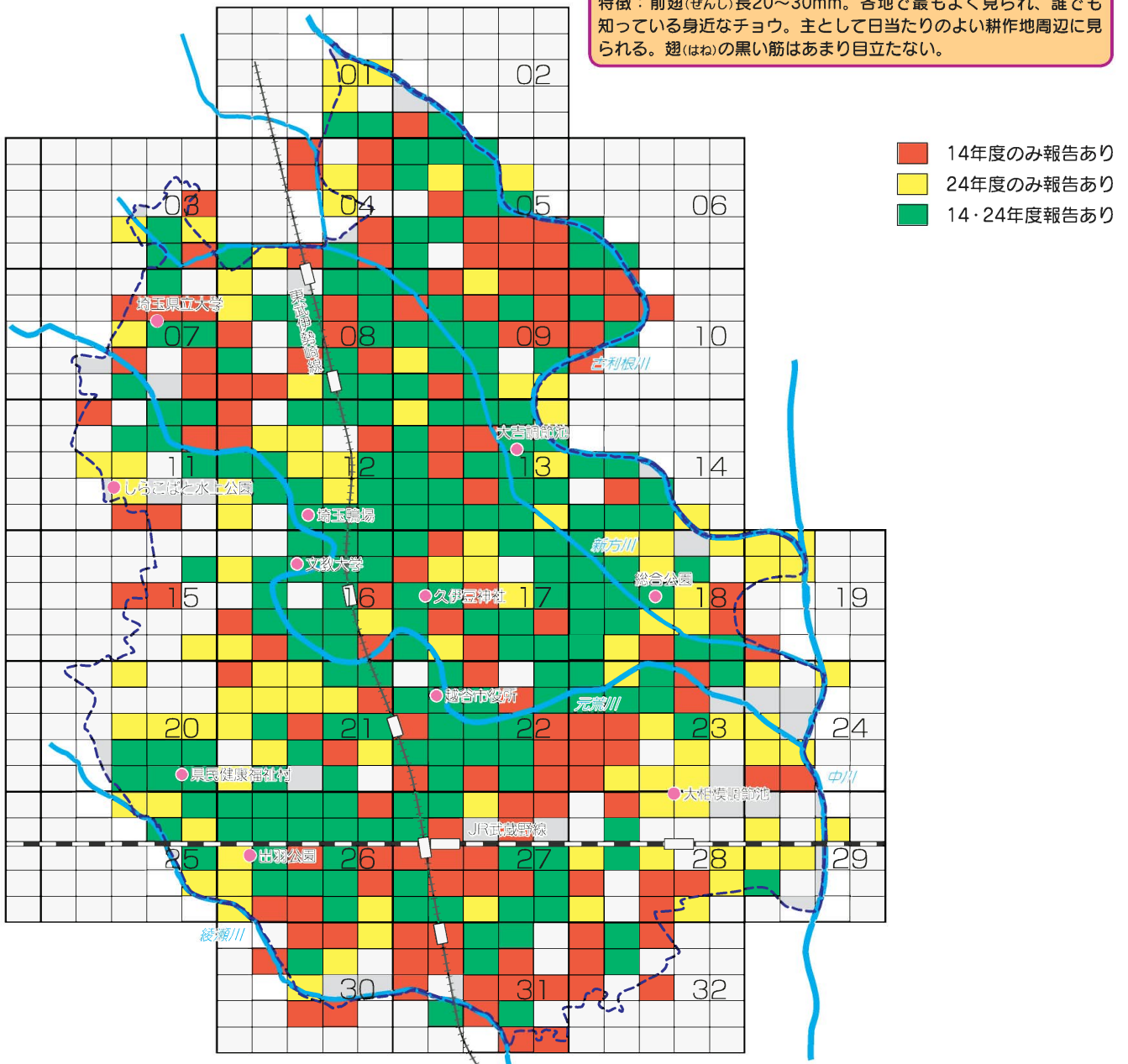
幼虫は、キャベツや、ブロッコリーなどアブラナ科の栽培種を好むが、田んぼの畦(あぜ)や土手に生えるイヌガラシなど、アブラナ科の野草も食草とする。ほぼ市内全域から報告されているが、平成24年度に耕作地周辺からの報告が減少した場所がある。最近では、農薬の殺虫剤によりキャベツ畑を乱舞するモンシロチョウの姿はあまり見られなくなった。また、田んぼでも、除草剤により食草や吸蜜源となる野草が育たない畦が多くなった。調査結果はこうした耕作地の状況を表しているのだろう。一方、市街地やレイクタウン付近からの報告が増えている。モンシロチョウは、日当たりが良くアブラナ科の植物が生育できる環境があれば、容易に姿が確認できるようになる。

(古谷愛子)

分布 日本全土

成虫が見られる時期 4～11月

特徴：前翅(せんし)長20～30mm。各地で最もよく見られ、誰でも知っている身近なチョウ。主として日当たりのよい耕作地周辺に見られる。翅(はね)の黒い筋はあまり目立たない。





29 スジグロシロチョウ..... シロチョウ科



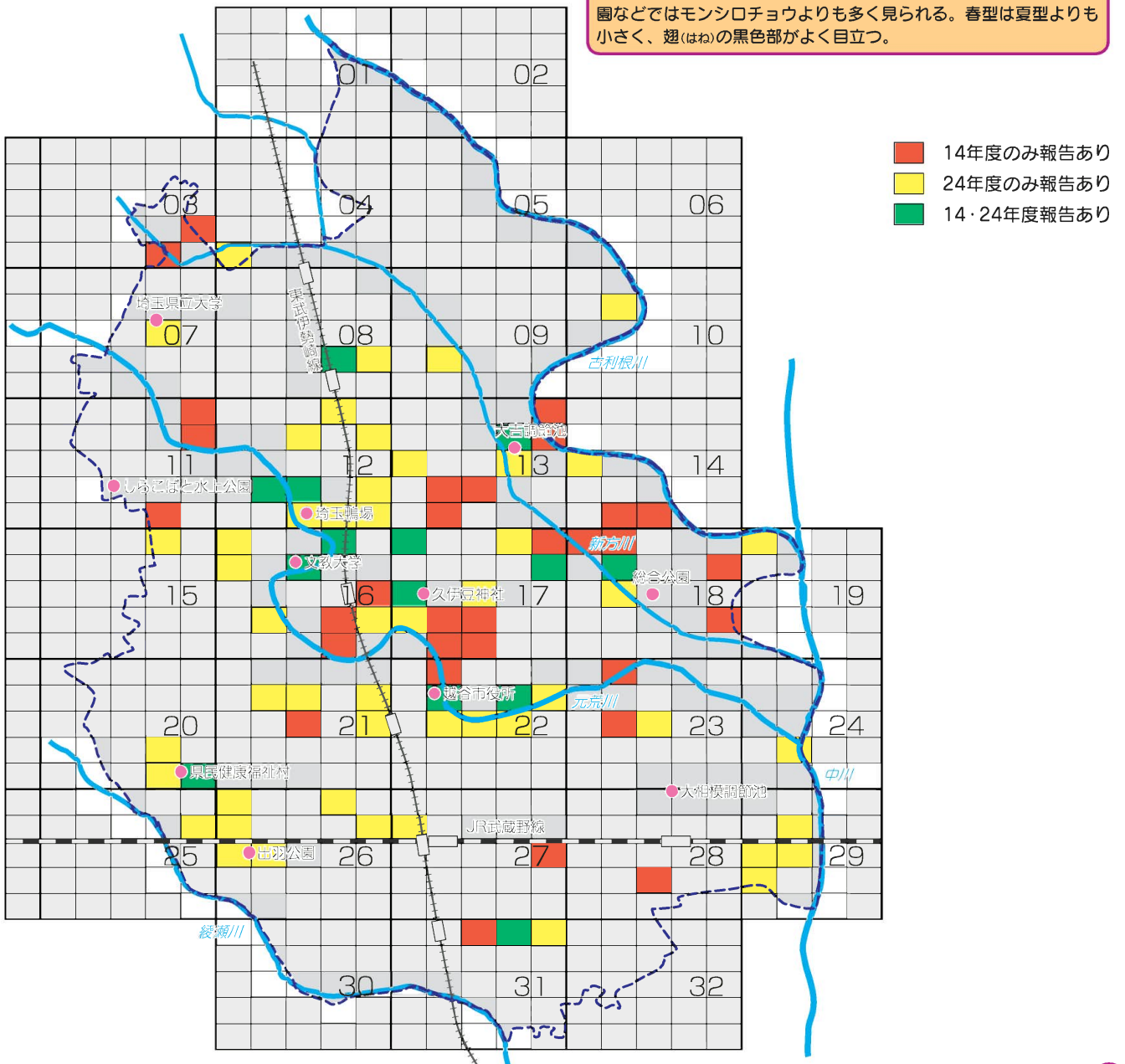
スジグロシロチョウは、林の周りなど、薄暗く、やや湿った環境を好む。それを象徴するように、開けた水田地帯や市街地からの報告が少ない。平成14・24年度ともに報告されたのは、元荒川や健康福祉村、大吉調節池等の樹木が多く、湿地環境の豊かな場所だ。14・24年度と平方地区に報告がないが、9年度の調査では平方の西部にまとまった報告があった。ここは当時、屋敷林が連続してこんもりと茂っていたが、現在は宅地化で樹林が激減した場所である。このように、都市化が進み、昔からの樹林地が減少する一方で、緑豊かな公園緑地が、スジグロシロチョウの生息地を担っていくと考えられる。

(古谷愛子)

分布 北海道から九州

成虫が見られる時期 4～10月

特徴：前翅(せんし)長24～35mm。林のまわりや木が良く茂った公園などではモンシロチョウよりも多く見られる。春型は夏型よりも小さく、翅(はね)の黒色部がよく目立つ。





30 アオスジアゲハ..... アゲハチョウ科



平成14. 24年度調査の両方で報告されたメッシュの多くは、公園や街路樹にクスノキが植栽されている場所と一致する。24年度にはレイクタウン付近からの報告が加わったが、これも開発地のクスノキの植栽に由来すると考えられる。クスノキは暖地の樹木で、越谷には自生しない。社寺林や屋敷林、雑木林等には、タブノキやシロダモなど、食草であるクスノキ科の樹木が自生するが、開発等による樹林地の消失とともに減少している。最近クスノキの実を食べた野鳥のフンによって、ちょっとした植え込みでクスノキが芽生え成長する様子を見かけるようになった。こうした状況から、今後もアオスジアゲハはクスノキに依存しながら増えていくと考えられる。

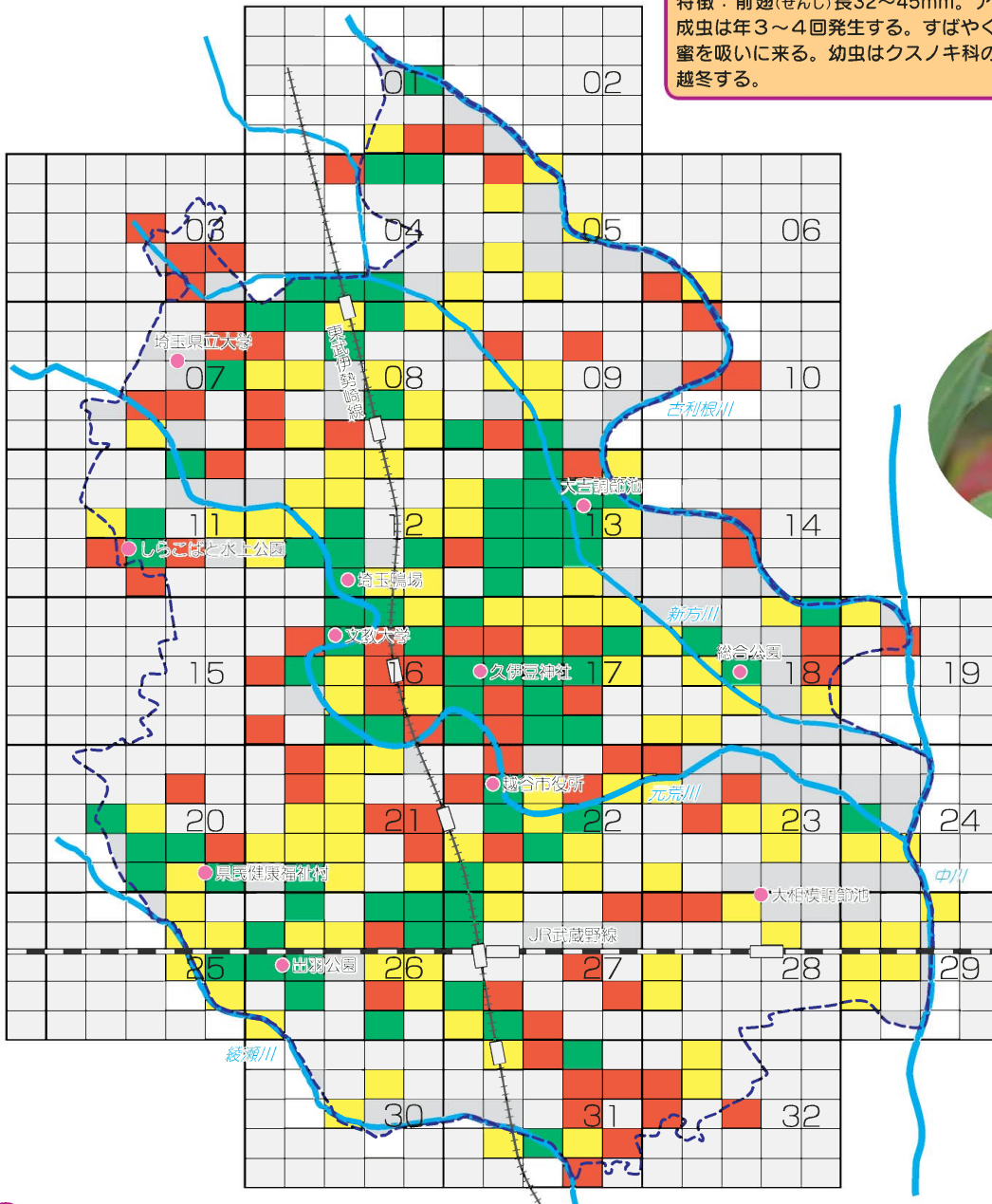
(古谷愛子)

分布 本州（秋田・岩手）以南

成虫が見られる時期 4～9月

特徴：前翅(せんし)長32～45mm。アゲハとしてはやや小ぶり、成虫は年3～4回発生する。すばやく飛んでヤブガラシの花などの蜜を吸いに来る。幼虫はクスノキ科の樹木の葉を食べ、蛹(さなぎ)で越冬する。

- 14年度のみ報告あり
- 24年度のみ報告あり
- 14・24年度報告あり



クスノキの実



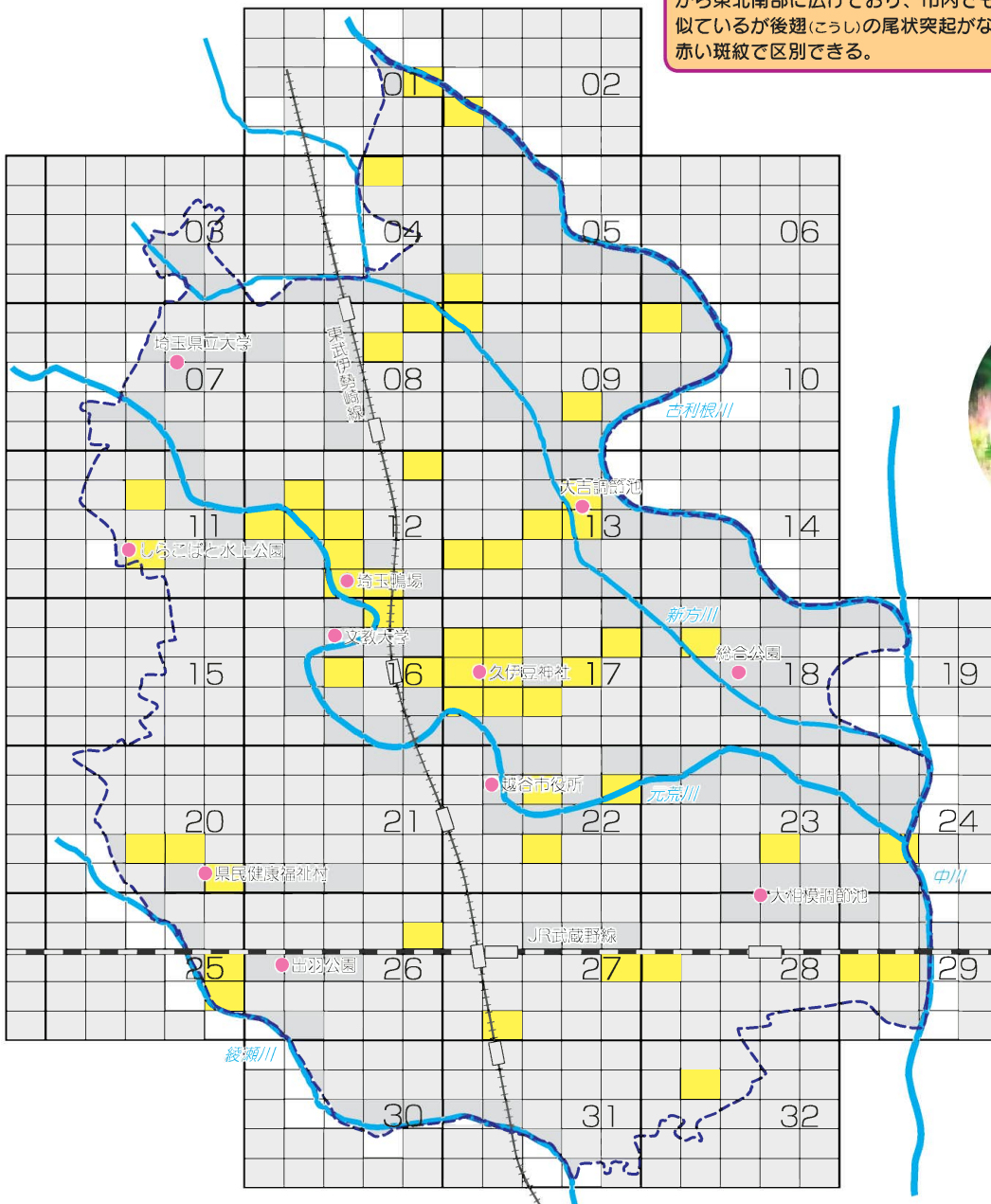
31 ナガサキアゲハ..... アゲハチョウ科



埼玉県で始めて記録されたのは平成12年の北本市。18年以降は大宮台地を中心にして分布が広がり、11年には、県南部でクロアゲハをしのぐ数にまで増えた。越谷市では14年度以前の調査報告がなく、19年度に4メッシュ4件の報告があるが、4件では、まだ市内での定着は考えにくい。指標生物になった24年度調査では、54メッシュ95件とほぼ全域からの報告があり、24年までの5年で、定着したものと考えてよい。近年の温暖化によって、市内でも温州(うんしゅう)みかん等の暖地の栽培ミカンがよく実るようになり、庭に植栽する家庭も増えている。こうした状況から、今後一層身近なチョウになると思われる。(古谷愛子)

成虫が見られる時期 5～10月

特徴：幼虫はミカンやカラタチなどミカン科の栽培品種を好んで食べる。国内の分布は九州や四国南部までとされていたが、近年関東から東北部に広げており、市内でも時々見かける。クロアゲハに似ているが後翅(こうし)の尾状突起がないことや、翅(はね)のつけねの赤い斑紋で区別できる。



■ 24年度で報告あり



クロアゲハ



32 ツマグロヒョウモン..... タテハチョウ科

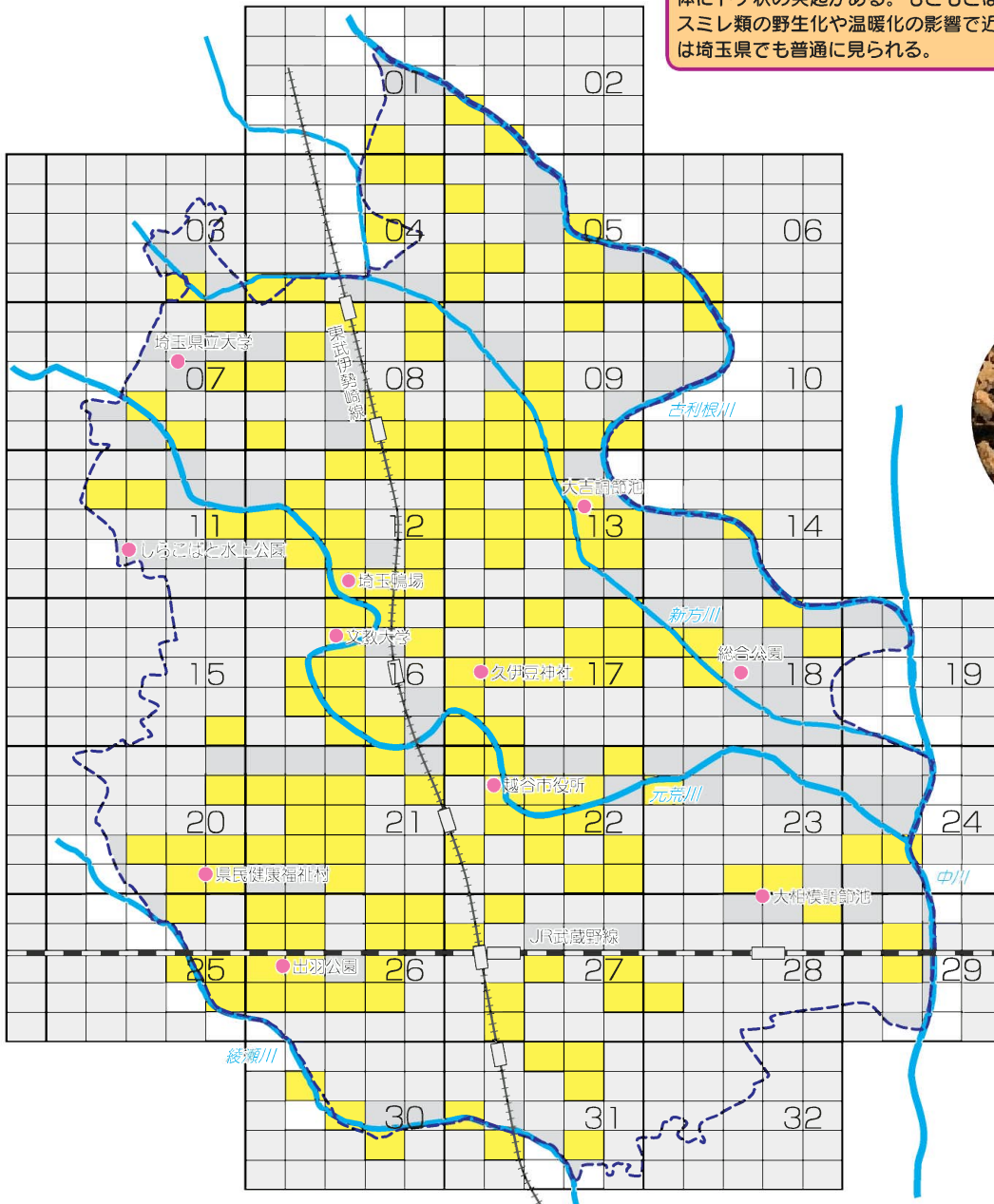


埼玉県南部では平成12年にさいたま市で確認された後、17年には県南部全域に広がった。越谷市では14年度以前の調査報告がなく、19年度には46メッシュ75件の報告があり、19年までにすでに定着したと考えられる。指標生物になった24年度では178メッシュ426件と、激増している。

南方系のこのチョウは、年に3~4世代が育つ。在来スミレやパンジーは夏に葉を枯らす、近年ではパピヨンスミレなど夏も葉を茂らせる栽培スミレが市街地でも野生化しており、夏の食草としてツマグロヒョウモンの増加を後押ししていると考えられる。一方で、在来種のみドリヒョウモンが、14年度調査の後、報告されていないのが残念だ。(古谷愛子)

成虫が見られる時期 4~11月

特徴：幼虫はパンジーなどスミレ科の栽培品を好んで食べるが、在来種のスミレも食べる。幼虫は黒色で背面に赤い筋が目立ち、体全体にトゲ状の突起がある。もともとは南方系のチョウだが、園芸用スミレ類の野生化や温暖化の影響で近年関東まで分布を広げ、現在は埼玉県でも普通に見られる。



24年度で報告あり



ミドリヒョウモン



33 コクワガタ.....クワガタムシ科



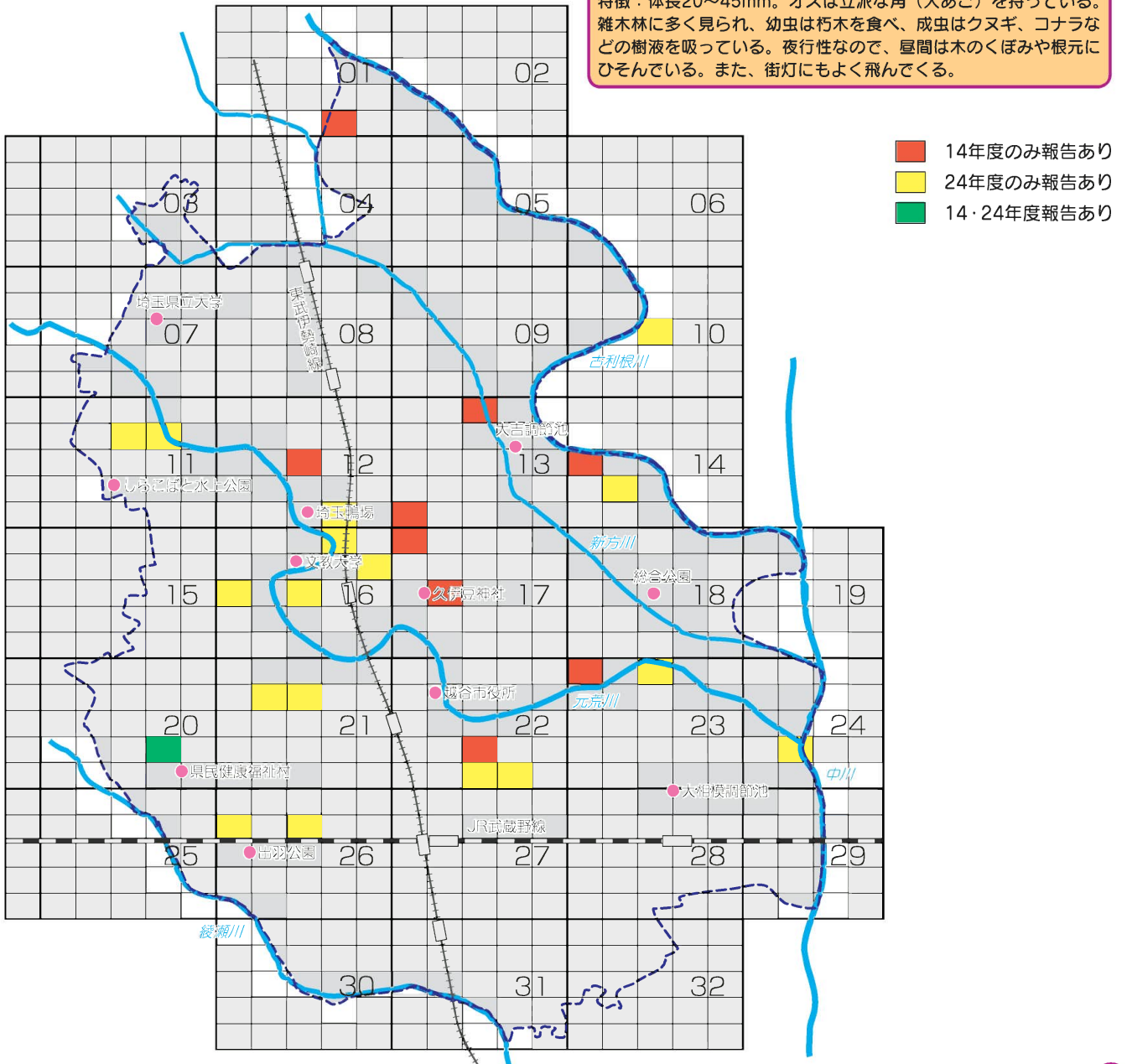
平成14年度10メッシュ10件、24年度18メッシュ21件で増加しているように感じるが、その間の19年度では、25メッシュ42件の報告があり、実際は減少している。19年度に報告され、24年度に報告がない平方と大泊地区内のメッシュでは屋敷林が明らかに減少している。また、9年度調査以降報告のない西大袋地区は、大規模な区画整理で屋敷林が激減した場所だ。コクワガタの生息には、街路樹のように木があるだけでは不十分で、屋敷林や雑木林のように、枯れ木が地面で朽ちていくような環境が必要だ。東京葛西用水沿いの谷古田緑道は、市街地にありながらクヌギやハンノキ、ヤナギ等の樹木が茂り、地面には枯木が存在し、コクワガタの生息も維持されている。

(古谷愛子)

分布 日本全土

見られる時期 6～9月

特徴：体長20～45mm。オスは立派な角（大あご）を持っている。雑木林に多く見られ、幼虫は朽木を食べ、成虫はクヌギ、コナラなどの樹液を吸っている。夜行性なので、昼間は木のくぼみや根元にひそんでいる。また、街灯にもよく飛んでくる。





34 ヒグラシ

セミ科



平成24年度、ヒグラシの報告数はクマゼミに追い越されてしまった。9年度調査で多く報告のあった西大袋と七左町地域は、その後、報告がなくなった。これは、双方ともに区画整理で樹林地が激減していることと一致する。14、24年度ともに報告されたメッシュ内、あるいはその隣接地には、住宅地、水田地域ともに、屋敷林や社寺林等の樹林地が存在する。ヒグラシはアブラゼミ等と違い、樹木を植えたからといって簡単には生息域を広げない。だからこそ、今いる生息環境を大切にしたい。越谷の景観や生きものの生息環境を支える屋敷林や社寺林を大切にするとともに、公園や公共施設等で多様な生きものが生息できるような豊かな林を作っていくことが必要だ。

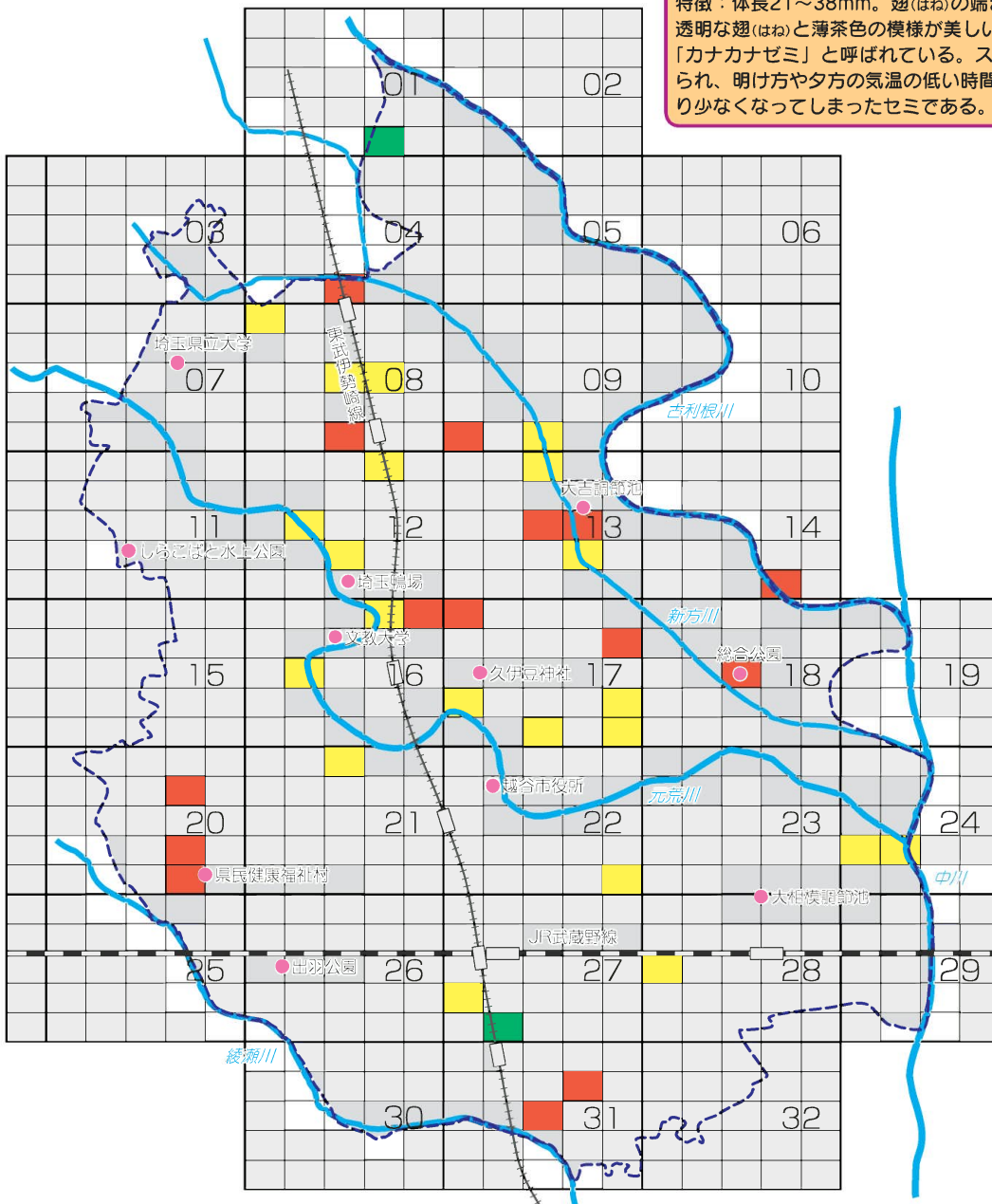
(古谷愛子)

分布 日本全土

見られる時期 7～9月

特徴：体長21～38mm。翅(はね)の端までは45～62mm。
 透明な翅(はね)と薄茶色の模様美しい中型のセミ。鳴き声から別名「カナカナゼミ」と呼ばれている。スギなどの混じる薄暗い林で見られ、明け方や夕方の気温の低い時間帯に鳴く。都市部ではめっきり少なくなってしまったセミである。

- 14年度のみ報告あり
- 24年度のみ報告あり
- 14・24年度報告あり





35 クマゼミ

セミ科



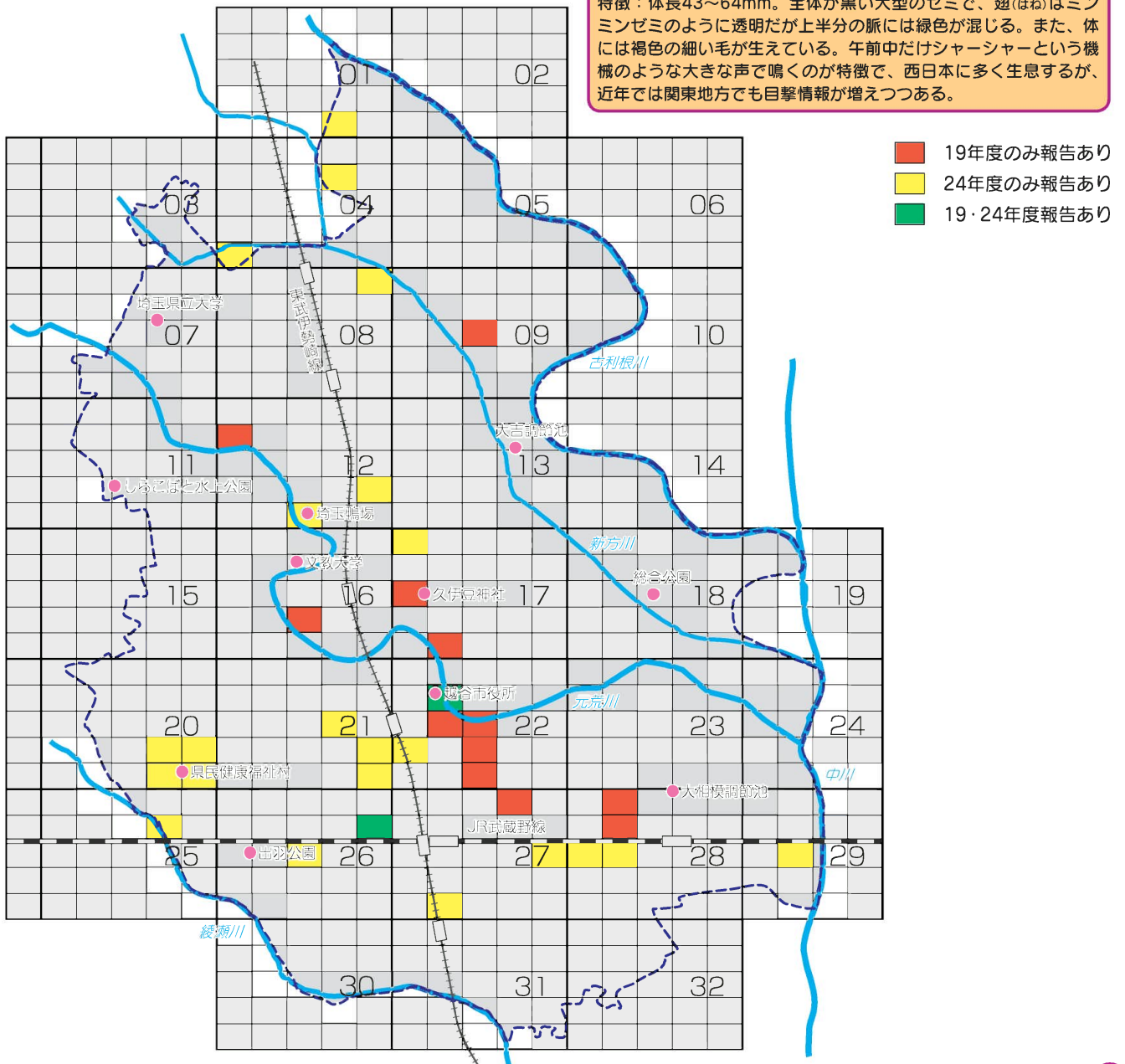
クマゼミの発生は、西日本から順に北上し、生息域が広がっているという説と、クマゼミの生息地で育てられた苗木が、幼虫がいる土とともに運ばれたことで突発的に発生しているという説がある。越谷市では平成14年度の調査時、すでに報告がある。指標生物となった19年度は、市中心地付近の市街地を中心に14メッシュ16件の報告があり、ヒートアイランド現象が起きている地域と一致していることが話題になった。

24年度は24メッシュ38件とほぼ倍増し、市中心部に加え、東武伊勢崎線（スカイツリーライン）とJR武蔵野線沿線の住宅街や公園のあるメッシュから広く報告されている。越谷の場合は北上してきたものがすでに定着し、市内に分布を広げていると言える。（古谷愛子）

分布 関東南部～沖縄諸島

見られる時期 7～9月

特徴：体長43～64mm。全体が黒い大型のセミで、翅(はね)はミンミンゼミのように透明だが上半分の脈には緑色が混じる。また、体には褐色の細い毛が生えている。午前中だけシャーシャーという機械のような大きな声で鳴くのが特徴で、西日本に多く生息するが、近年では関東地方でも目撃情報が増えつつある。





36 オオカマキリ..... カマキリ科



平成9年度から24年度調査まで、メッシュや報告件数に大きな変化はなく、河川付近や、農地と住宅が混在する場所、樹林のある公園など、樹林と草が接する場所からまばらに報告がある。卵囊(らんとう)は、セイタカアワダチソウやヨシの茎、木の枝などに産み付けられる。卵囊が地面に落ちてしまうと、幼虫が孵化(ふか)に失敗したり、敵に襲われたりしてしまうため、秋から冬に草刈りがされない場所や、樹木の生える場所が必要だ。カマキリの仲間はみな肉食なので、エサとなるバッタやチョウ、トンボなど他の昆虫の生息も重要。学校や公園等では、殺虫剤や除草剤の使用を控えることで、バッタなどの昆虫類も増え、カマキリも、もっと身近な生きものになると思う。

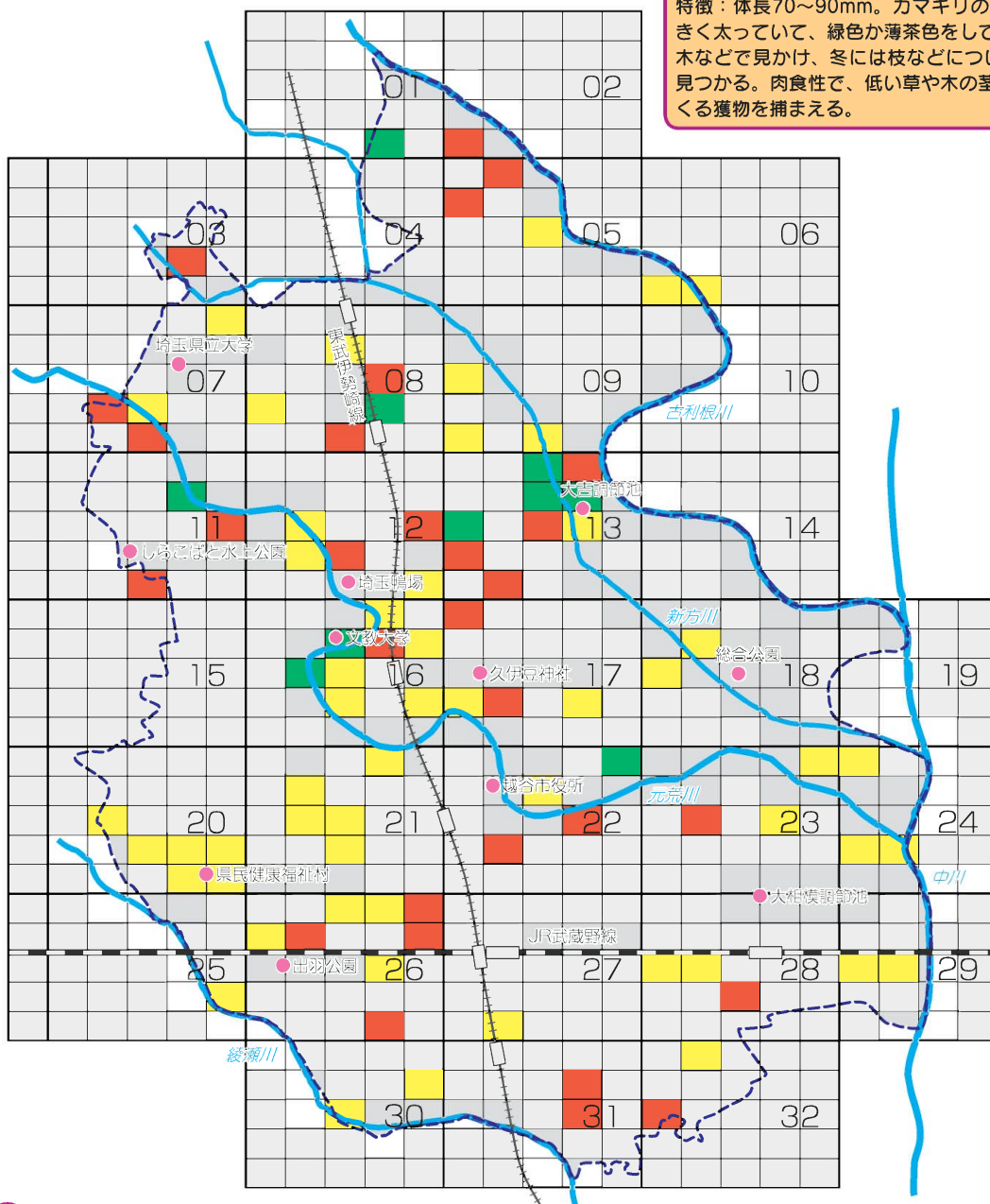
(古谷愛子)

分布 本州以南

成虫が見られる時期 8~11月

特徴：体長70~90mm。カマキリの中でも大型で、メスは特に大きく太っていて、緑色か薄茶色をしている。人家の生垣、公園の樹木などで見かけ、冬には枝などについた“贅(ぶ)”のような卵囊が見つかる。肉食性で、低い草や木の茎、葉にとまっていて、やってくる獲物を捕まえる。

- 14年度のみ報告あり
- 24年度のみ報告あり
- 14・24年度報告あり





37 シオカラトンボ..... トンボ科



オス



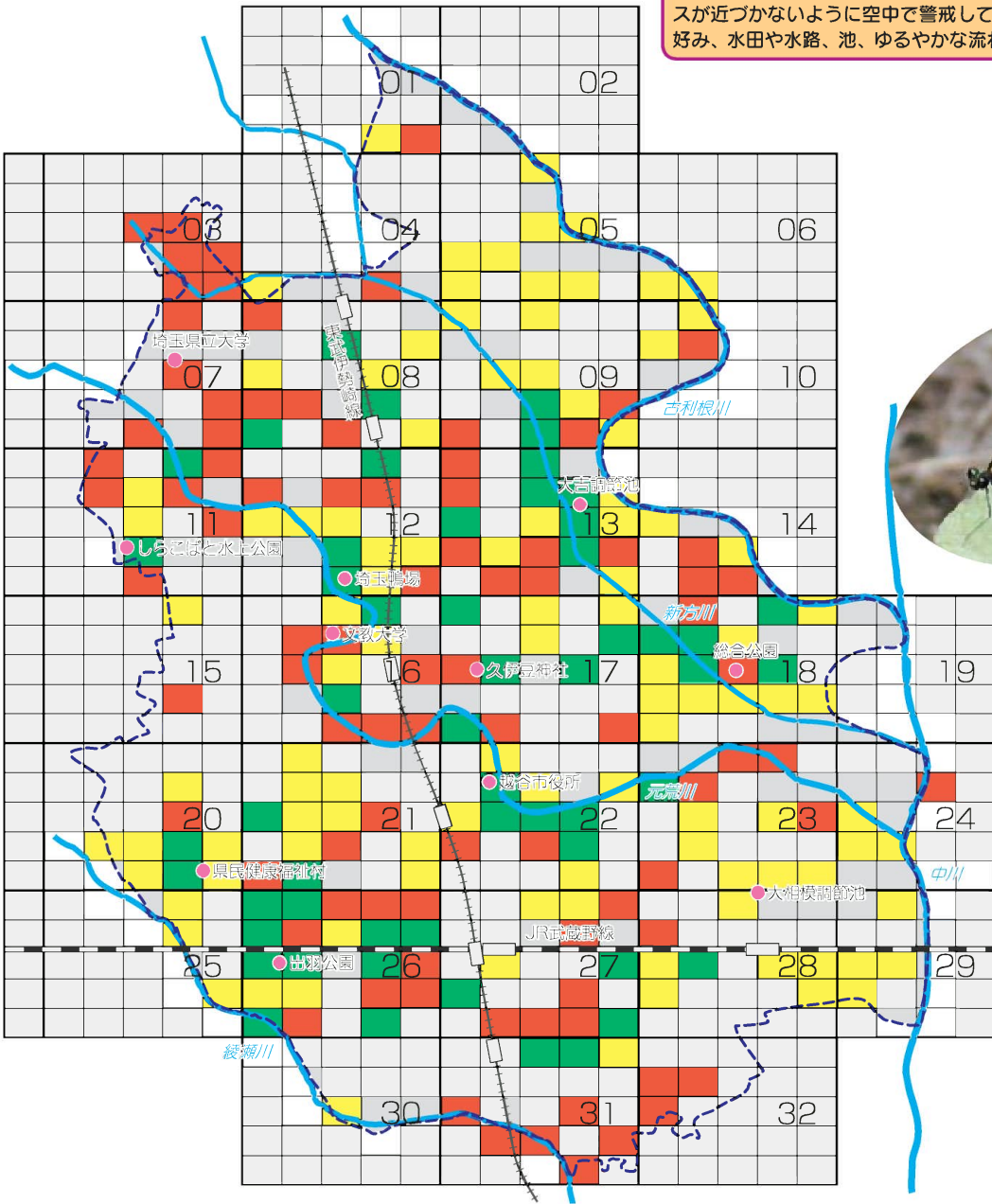
メス

毎回、ほぼ市内全域で報告があり、水郷越谷を象徴している。河川や、大きな農業水路、池のある公園付近で報告が多い。水質の悪化に耐え、コンクリート護岸の水路でも生きられる一方、幼虫で越冬するため、冬でも水のある環境が必要だ。平成24年度にレイクタウン付近から新たな報告が増えたのも、大きな池の存在による。水田地帯から報告が少ないのは、細い農業水路の多くは冬に水がなく、越冬できる幼虫が少ないためだろう。シオカラトンボは都市化された環境でも見られるが、水田で育つアキアカネや、河川の良好な水質や水草、周辺の樹林が必要なハグロトンボは、以前に比べて見ることが少なくなった。多様なトンボが生息できる越谷であって欲しい。（古谷愛子）

分布 日本全土

成虫が見られる時期 4～10月

特徴：体長50～55mm。オスはメスが産卵している間に、他のオスが近づかないように空中で警戒しています。平地の明るい場所を好み、水田や水路、池、ゆるやかな流れの川岸などに生息している。



ハグロトンボ